

Title	惜しみても尚あまりあること
Sub Title	
Author	板倉, 卓造(Itakura, Takuzō)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1962
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.35, No.11 (1962. 11) ,p.99- 101
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	島田久吉教授を偲んで
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19621115-0099

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

惜しみても尚あまりあること

板 倉 卓 造

島田君は生得の体質決して健強の人ではなかつたように思われるのに、また決して細心な養生家でもなかつたことはたしかである。だから非常に長生きする人とは想像していなかつたけれど、しかしまだ六十にも至らないで、早く死んで往かれるなぞいうことは、私にはトテも思いもよらない驚きであつた。学問をするものは大概長生きであるのが、古今東西の通則であり、七十以上の老学者は現に内外の学界いくらでもおり、人生還暦をも待たないで往く人こそ例外である。島田君がその例外の一人となつたのは、惜しみてもあまりあることであつた。

島田君が惜しまれるのは何といつても第一にそのすぐれた秀才であつた。そのすぐれた学才は学生のときから認められてい

た。もつとも学生としては教室に出席する点に於て、明白にすぐれた勉強家であつたとは、私の闇魔帳の中には書きとめてない。しかしいつの試験にも成績は優秀であり、同級生から最高の尊敬をうけていた。卒業のとき島田君を学校にのこすように熱心に推薦して来たのは同級生であつた。教授会は満場一致で速かにそれをうけ容れた。

島田君の学才について、同君を知るものの異口同音に敬服するのは、その博覧強記の非凡な長所であつた。専攻の政治学に關する博大な学識はいうまでもない所であるが、学問外の方面で殆んど万般に亘つて知らないことのないというほどの博識な物知りであつた。歌舞音曲、茶事華道、酒のこと、料理のこと、和漢洋に及ぶその該博な知識は、私の如き無知なものを毎度感心せしめたものである。殊に会食の席上、多少の酒氣を帯びるとともに、快弁おのずから流るる如く、その広大な知見を放散して、周辺あたかも無人の壯觀を呈したことが、幾回あつたか知れない。

島田君はよく笑いよく語つた。興に乗じて語るときは、いわゆる談論風発して、相手には語る機を与えず、独り大に語つて

独り大に笑つていた。その大に語るや、多年の蘊蓄をつぎからつぎに傾けて、尽きる所を知らず、その雄弁には座中一人の抗するものがなかつた。その蘊蓄する所の一端を示すものに、先般出版された「机の塵」がある。このうち曾て時事新報紙上に載せられたものの如きは、当時最も多くの読者を得たものであり、話題の豊富で題材の奇抜なこと、しかも行文の自由自在なこと、まことに天下一品の妙をきわめたものであつた。

座談の名手であると同時に、鳥田君はまたテーブル・スピーチの名人でもあつた。テーブル・スピーチは即席演説（*Impromptu*）であるから当意即妙の機知縦横に、しかも自然に滾滾湧発する天才人でない以上、メッタに成功するものではない。ところがわが鳥田君はこれについて全く堂に入ったもので、即席即興の妙技には毎度同席して感服喝采したものである。畢竟博覽強記の故に即時にその場、その時に即応する話材が即射即発されるのである。鳥田君のテーブル・スピーチは私がかたびたび楽しんで聞いた名人芸であつた。

鳥田君は元来あまり勞せずして学問の研究を遂げ得た名人型の学者であつた。というのは彼は生まれながらに記憶力の強大

な持主で、一度読んだものは決して忘却することのない驚くべき強記の学者であつたからである。だからこそまた容易に博覽の学者たることを得たのである。彼は誰よりも最も簡易に学問を研究し得たのであつた。私は早くより記憶の急速なる喪失者であつて、読んだものをあとからあとから忘却して、あとに一物をも残すことなく、老来それが更にヒドクなつたので、ときどき鳥田君に「昔こいう話を何かの古書で読んだことがあるのを、ウロ覚えにおぼえているのだが、どうしても思い出せない。君おしえてくれないか」と申すと、鳥田君は大抵言下にそれはしかじかと、その本の著者、書名は勿論、凡そその書の何百ページの中ほど、何巻のどのあたりと、恰かも掌中の物を指すが如くに即答してくれた。だから私は本を読んで丸忘れしても、鳥田君さえいてくれれば大助りであつた。その鳥田君を失つて、私の学問はいよいよ浮きあがり状態である。

学者としての鳥田君は決して著書多作の人ではなかつた。鳥田君の先輩や後輩の中には、よくまああんなにも続々書けるものだと、恐れをいだくに足る大小の学者があるのに、その先生格たる鳥田君には著書も論文も非常に少なかつた。友人達はそ

れを残念に思つて、著作を勧めたこともあつたそうだが、生来の大無精者たる島田君を動かすことを得なかつたのである。この点に於て同様の無精者たる私には、島田君の性格がよく理解できる。

しかし島田君の学問上の遺稿を大集すれば、必ず立派な一巻を成し得ると思う。私の記憶する所では、昭和三十五年二月号の法学研究に載せられた墨子に関する論文（東西・比較政治思想上の若干問題）が、多分同君の学術論文として、私の知る最後のものであると思うが、たしかに島田君の学問を最高に代表する労作である。これは彼自身相当な自信を以て発表したもので、後日私に向つて、あれを読んでもくれたかと、得意満面に語つたその顔色を、今日ハッキリ思いだせる。少し勉強して書いていたら、学界を指導するに足る名著がいくらでもできたであらうことを、今更ら惜しまれてならない。

島田君を失つて最もその死を惜しむものの一人は私である。惜しみても尚あまりあるという言葉の実感を、私は故島田久吉君について最も切実に体験する。

（昭和卅七年八月十九日）